



めいおんの会

「めいおんの会」

(名古屋音楽大学出身教員の会)

発行責任者 会長 川合 恒之

「楽しい授業」

名古屋音楽大学教職担当 川合恒之

教員採用試験の日程が数年前から全国的に早まり、5月から6月に一次試験を行い7月中に二次試験を行う自治体が多くなりました。そのため、学生たちは前期の教育実習と同時進行で教採の最終準備を進めています。また、3年生で一次試験を受験できる自治体もあり、すでに一次試験をクリアしている学生も何名かいました。そんな状況もあって今回は二次試験対策である面接練習を、比較的早い時期から始めました。志望動機や理想とする教師像を尋ねたり、場面指導や模擬授業の練習をしたりする中で、「どんな音楽の授業がしたいですか。」という質問もして



います。すると多くの学生から「楽しい授業がしたいです。」という返事が返ってきます。「では楽しい授業とはどんな授業でしょうか。」「楽しい授業にするためには何が必要ですか。」と一緒に考えていきます。

今年度から名古屋音楽大学での勤務も月曜日だけとなり、残りの曜日を名古屋市立の中学校で非常勤講師として授業を行っています。久しぶりの現場で不安もありましたが、同時に新しい気持ちでまた挑戦できる期待もありました。幸いにもよく指示を聞いてくれる生徒たちで、思うような授業ができていますつもりでした。



1年生の授業でのことです。校内合唱祭が10月初めに予定されていることもあり、1学期はどうしても歌唱中心に進めなければならず、発声練習を常時活動に取り入れ、のびのびと元気よく歌えることに力を注いでいました。練習方法を気に入ってくれたようで、特に何人かの男子はちょっとした振りをつけて、笑顔で本当に楽しそう歌ってくれていました。まさしく見た目は「楽しい授業」です。

ある時、女子生徒から「男子がふざけていて授業に集中できません。」と言われました。楽しく盛り上がっていることに甘えて適当な授業になっていたことに気がきました。楽しそうな表情も確かに喜びですが、例えば共通教材などをしっかりと深く学んでいる時や、合唱曲を仕上げていく時などに見せる真剣な眼差しや表情こそが、充実した本当に楽しい授業の証なのだと思います。思い出することができました。

「楽しい授業」についてだけでなく、限られた時間の中での対話的な学習、そして評価などお聞きしたいことばかりです。「めいおんの会」の皆さんとぜひお話がしたいと強く思いました。

◆会員の異動◆

8月8日現在めいおんの会把握分(SHR 卒年)名古屋市立は市名略、愛知県は市町村名記、他は都道府県名記

【講師】<転任>藤松真人(59)若葉中→昭和橋中、塚寄崇史(60)当地中→久方中、

志知 愛(H9)藤が丘小→名北小、三浦和世(H7)西尾・寺津中→東海・富木島中、

森田育未(R5)常滑・常滑東小→知多市立新田小学校、

山本なつめ(R4)東郷・兵庫小→東郷・高嶺小

<新任>藤田 流加(R7)知多・知多中部中



寄稿

「寄り添うことの大切さと難しさ」

稲沢市立領内小学校教諭 三橋 真海 (R6 卒)

子どもたちに寄り添うことの大切さと難しさを毎日感じながら、教員生活2年目を迎えました。私は約2年前の教員採用試験の面接の際に、子どもたちに寄り添うことのできる教員になりたいと答えていました。しかし、いざ学校現場で子どもたちの前に立ってみると、寄り添うとは本当に難しいことであると感じさせられました。一人一人が異なる家庭環境、価値観、交友関係をもつ子どもたちに対し、私の価値観や経験だけでは子どもたちに寄り添うことができないと感じました。そのため、子どもたち一人一人を理解しようと、休み時間は子どもたちと鬼ごっこをしたり、将棋を指したり、最近あった何でもない出来事を語り合ったりと、子どもたちの目線でも物事を見ることを大切にしています。

しかし、私のこれまでの経験が子どもたちに寄り添うことに繋がると感じる出来事もありました。学校生活に対し困り感を抱えている子どもに、私も小中学生の時に同じような課題を抱えており、とても苦労した経験があることを伝えました。また、その時の私の気持ちなどを話すと、少しずつ今の気持ちや、たわいもない話をしてくれるようになりました。これをきっかけに少しだけですが、心の距離が縮まったように感じました。この経験から、教師として正しく、あるべき姿を示すだけでなく、時には等身大の自分で子どもたちにぶつかっていくことも大切であると感じました。

子どもたち一人一人は異なる家庭環境、価値観、交友関係をもっています。一人として同じ子どもはいないため、前回上手くいった対応が、今回も上手くいくとは限らないと学んだ1年4か月でもありました。子どもたち一人一人に寄り添うために、限られた時間の中で、多くの時間を子どもたちとともに過ごすこと、私自身が様々な経験をするを大切にしたいです。



「声がひらく、そのとき」

西尾市立鶴城中学校教諭 伊藤 瑠里 (R5 卒)

新任の頃から、さまざまな場面で「教員は授業が勝負」という言葉を幾度となく耳にしてきました。多感な時期にある中学生に、授業を通して何を伝えられるのかを日々模索しながら、「よい授業とは何か」を考え続けています。日頃の授業では、歌うことに恥ずかしさを感じたり、楽しさを見出せなかったりして、なかなか口を開こうとしない生徒もいます。今年度も、私自身が楽しむ姿を見せ、「一緒に学びたい」という思いを言葉にして、生徒と同じ目線で共感し、認め合いながら、少しずつ関係を築こうとしています。昨年度は、初めて卒業生を送り出しました。卒業式の練習では、「言って・見せて・やらせる」を繰り返しながら、全員と真剣に向き合いました。体育館を超えて歌い響く力強い合唱は、今日の私の活力となっています。大きく成長し、堂々と旅立っていく生徒たちの姿を見たとき、「だからこそ先生たちはこの仕事を続けているのだ」と実感しました。

教員は、あらゆる方向に気を配る必要があり、疲れてしまうことも、憤りを感じることもあります。また、教員の仕事は授業だけではなく、学級経営、生徒指導、委員会、部活動など、任される業務は多岐にわたります。「授業が勝負」と言われても、経験の浅い私にとっては無力感を覚えることも少なくありません。しかし、そっと寄り添い、道標を示してくれる先生方に支えられ、生徒もまた、日々真摯に向き合うことで、耳を傾け、他者を思いやる心を持ち、少しずつ成長してくれます。人との関わりで出来ているからこそ人間らしくいられる仕事だと感じているところです。今後も、声を重ねることの意味や楽しさを、今日の前にいる生徒たちと一緒に見つけていけるように向き合っていきたいと思います。

